

第2 教育研究団体の意見・評価

○ 全国英語教育研究団体連合会

（代表者 中村 勝徳 会員数 約60,000人）

T E L 03-3267-8583

1 前 文

今年で5年目となる共通テストは、2022年4月の高等学校の学習指導要領の改訂に伴う新課程テストであった。昨年までと同様に、聞き取った音声を他の表現に言い換える力や、様々な情報を聞き取り、ワークシートや図表、選択肢と照らし合わせて整理する力を問うことを通して、知識・技能や思考力・判断力・表現力等を問う内容となっている。情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を育成する、という学習指導要領における目標を反映した出題となっている。

今年の共通テストでは、2022年に発表された試作問題を反映した出題がなされた。あるテーマについての大学の講義を聞き、その内容を伝え合ったり、自分たちが調べてきたことを踏まえてディスカッションをする場面を取り上げることで、「聞くこと」と「話すこと [やり取り]・[発表]」の統合的な言語活動により、学んだ内容の理解をより深めるような学習の過程を設定した問題である。「各設問では、こうした学習の過程で求められる力、例えば、講義を聞いて概要・要点を把握する力、聴き取った情報を他者と共有したり、話し合ったりする力、聴き取った情報と問題文中に示されたグラフ資料を統合的に処理する力等を問う」とされた問題が第5問で出題されたが、今年度新たに問題が出題された問題も含め、受験者が戸惑うような部分はなかったと思われる。

大問数は6問で、マーク数も37と昨年度と変わらなかったが、細かな内訳を見ると第1問Bの短文イラスト選択問題が昨年度の3問から今年度は4問と一つ増え、第2問の対話文のイラスト選択問題が今年度は3問と昨年度より一つ減少している。また、読み上げられた総語数は1,592語で昨年度（1,547語）とほぼ変わらず、質問・選択肢の総語数も515語と昨年度（582語）とほぼ同じであったと言える。令和7年度「英語（リスニング）」本試験の平均点は61.31点で、昨年度から5.93点下がっている。全体の語数や設問数は同程度であったにもかかわらず、やや難化したという評価になる。設問ごとの正答率を見ると、一部の設問について多くの受験者が苦戦したものがある。「英語（リスニング）」は「英語（リーディング）」と並んで共通テスト受験者のほとんどが選択する科目である（令和7年度教科選択率97.9%）ことを考えると、他の科目よりも一層丁寧な作問が求められることは留意いただきたい。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

令和7年度の共通テスト「英語（リスニング）」は以下のような構成であった。

大問	配点	マーク数	出題内容	読み上げ回数
1	28	4	A：短文内容一致問題	2
		4	B：短文イラスト選択問題	
2	12	3	対話文イラスト問題	1
3	18	6	対話文選択問題	
4	12	8	A：モノログ図表完成問題	
		1	B：複数のモノログ選択問題	
5	16	7	講義内容選択問題	
6	14	2	A：対話文（2者）選択問題	
		2	B：対話文（3者）選択問題	
合計	100			

前文でも触れたが、出題形式、配点、読み上げ回数については、大きな変更はなかったと言える。

今年度の問題も、イラストやグラフ、図表が数多く使用されていたり、単純な英語の聞き取りだけではなく、様々な場面や目的に応じた思考力や判断力が問われている。また、話者についてもアメリカ人だけではなく、日本人を含む非ネイティブと思われる多様な話者が含まれていた。また、共通テスト開始当初問題となっていた各問の解答時間については、いずれの問いにおいても十分に確保されており、受験者が落ち着いて取り組めるようになっていた。

第1問 短い発話を聞いて、内容と合致する選択肢を選ぶ問い。Aは短い発話を聞き、短文の選択肢から正解を選ぶ問題である。Bは短い発話を聞き、その内容と合致するイラストを選ぶ問題である。

問1 天気に関する話題。「朝は晴れていたのに今は雨が降っている」という状況から、「車で送ってくれないか」と依頼をしている。慣れ親しんだ話題であり、状況も理解しやすく、一番最初の問題として非常に適している。選択肢の時制が現在と過去が混在しており、難易度も適切である。

問2 「宿題が終わるまでは泳ぎに行かないでおこう」という提案を聞き取る問題。Let's not ～の表現も平均的な受験者は問題なく理解できていたようである。

問3 「券売機が紙幣を受け付けない」という発言と合う選択肢を選ぶ問題。聞き取りの要素に加えてやや高度な語彙（bill）や語法の知識（both A and B や A but not B（正解））が問われている。

問4 「来年の遠足の行き先」についての発言。最後の“Not far, I hope.”から“～ somewhere far away”を含んだ錯乱肢を選択した受験者も多かったのではないだろうか。第1問の中でもこの問いだけが正答率が40%に満たない。

問5 発言内容から欲しい時計と合致するイラストを選ぶ問題。色、形を表す語も平易である。

問6 三人の人物の服装を描写している。「誰も手袋をしていないが、二人はマフラーをしている」ことが聞き取れれば容易に解答できると思われるが、正答率は60%程度であった。

問7 子供と犬についての描写。“being pulled by the dog”を聞き取ると同時にその内容（引っ張られている）を理解することがやや難しかったと思われる。最後の“Let's help!”だけを聞き取り、㊸を選択した受験者も多かったのではない。

- 問8 クーラーボックスの大きさと、魚の数を聞き取る問題。“was expecting to catch a lot of ~”, “~ only caught a couple.” がポイントとなる。特に “a couple” はやや難易度の高い表現かと思うが “only” があることから受験者には理解しやすい問題であったと思われる。
- 第2問 日本語で書かれた場面について短い対話を聞き、その内容と合致するイラストを選ぶ問題。設定された場面はいずれも分かりやすいものであり、示されたイラストも紛らわしい部分がなかったため、この問い全体の得点率も約85%と非常に高い。
- 問9 アプリの配置位置について聞き取る問題。“at the bottom” と “at the top” という基本的な位置を示す表現が使われており、平易な問題である。
- 問10 デザイン、形状、値段の3つを聞き取り、正しい組合せを選ぶ問題だが、形状 (bottle/box) はどちらでも良いと言っていることからsunshineのデザインでより安価なもの (cheaper) が正解となる。検討する要素は多く、複雑さもあるように思われるが、95%近くの正答率であったことから非常に平易な問題であったと言える。
- 問11 出かけるルートの確認をしている場面。対話の全ての部分を正確に聞き取る必要がある点で、良問と言えるが、難易度的には高くない。
- 第3問 第3問より音声は1回しか流れない。本問全体の得点率は56%ほどで、やや低い。2.5～3往復の対話を聞き、設問に答える問題で、第2問と同様に日本語で対話の場面が記されている。対話の概要や要点を把握する力に加えて、聞き取った内容を言い換える（パラフレーズする）ことも求められている。
- 問12 対話の内容から次にとるであろう行動を答える問題。“So we don’t have to ~” に対する応答 “No, ~” の意味を理解している必要がある。
- 問13 対話の内容から現在いる階がどこかを答える問題。“calligraphy”, “That’s where we were.” などやや難易度の高い語彙や表現が使われているが、“the fourth floor” と “we’re one floor below that” が聞き取れれば解答できる。
- 問14 女性の “Taxi fare is just a bit more than two bus tickets.” という発言と、続く男性の “~ it won’t cost much more than the bus.” が聞き取るポイントとなる。日常生活でもよくある場面で良問だが、正答率は39.9%とかなり低い。
- 問15 日時を表す表現が複数扱われている。“the day after tomorrow” が理解できていれば容易なはずだが、正答率は37.9%と第3問の中でも最低である。“the concert” = “the performance” = “the big day” と言い換えがされていることで難易度が上がったと考えられる。
- 問16 二人に共通することは何かを答える問題。聞き取り内容や選択肢にも特に難しい部分はなく、正答率もかなり高い。
- 問17 男性が心配していることが何かを答える問題。正解となる選択肢の “Having personal details known” が男性の最後の発言と一致しており、その他の選択肢も内容は明らかだが、正答率は51%とやや低く、受験者にとっては難易度が高い問題であったと言える。言い換えの部分 (all my information = personal details) がうまく捉えきれなかったのかもしれない。
- 第4問 Aはグループの発表を聞き、ワークシートのグラフを完成させる問題と、週間天気予報を聞き、表を完成させる問題。いずれも日常生活や学校生活でしばしば目にする場面や内容が扱われている点で良問である。Bの四人の話を聞き取り、条件と合うものを選ぶ問題は、正答率も83%とかなり高く、受験者も共通テストの出題形式に慣れてきた様子が見える。
- 問18～21 大学生が朝食に何を食べているかについての調査結果を示したグラフを完成させる問題。増減を表す表現を聞き取ることで解答できる。数値を表す表現としては標準的なものであるが、聞き取るポイントとなる副詞の部分でやや高度な表現が使われている。(fairly consistently)

また、4つのグラフについて立て続けに説明されていくので、かなりの集中力が必要とされる点で、難易度としては高めであった。

問22～25 旅行先の週間天気予報を聞き取る問題。曜日ごとではなく天気の変化ごとにまとまりができていて、やや難易度は高めの設定のようにも思われるが、Mondayから順番に説明されていくので、受験者にとってはむしろ取り組みやすかったと思われる。ただし、問22のみやや正答率が低かった。“a lot of showers” = “Rainy” がやや捉えにくかったかもしれない。また、選択肢は2回以上使っても良いとなっていたが、複数回使用する選択肢はなかった。

問26 サーフィンをするために、四人のサーファーの話を聞き、条件に合うものを答える問題。複数の情報をそれぞれ聞き取る必要がある点で、求められている作業量が多いが、上述のように高い正答率を示している。条件Bの「波の高さ」については“less than”, “about”, “at the most” など細かい聞き取りが求められた。また、“in charge of”なども含め、基本的な知識が聞き取りの前提として求められている。

第5問 第5問では、試作問題からの出題が含まれた。昨年度までは「状況」のみが与えられた上で、講義を聞きワークシートを完成させる形式だったが、今年度では「状況」に加え「活動1」～「活動3」が示された。試作問題でも示されていたように、各設問において、学習の過程で求められる力を問う問題を、「リスニング」という試験において出題することに尽力いただいていた作問者の皆様には改めて感謝の意を伝えると同時に、今年度の結果を踏まえ、引き続きの創意工夫をお願いしたい。講義の内容は贈答文化についてであった。

問27 講義で述べられている大意をまとめた文であるワークシートの冒頭の空欄箇所に適切なものを選ぶ問題。正答率が63%程度であることから、標準的な受験者は講義についての大意把握はできていたと考える。

問28～31 活動1として、ワークシートの空欄に適切な選択肢を選ぶ問題。いずれの選択肢も単語であるが、やや高度な語彙（progressive/unappreciated）も含まれていた。また、ワークシートで使われている表現もunbotheredやregifterなど余りなじみがないと思われる表現が散見された。受験者は問題を先読みし、できるだけ多くの情報を得てから音声聞くという手順で臨んでいるはずだが、本問については得られる情報量が少なく、場合によってはむしろ混乱を来した者もいたのではないだろうか。特に問28については音声中盤で説明されている。“regifters remain overly concerned” = “worried”を一度の聞き取りで捉えることは非常に難易度が高かった。問29についても“be content with” = “satisfied”は知識としては知っていても一度の聞き取りから正確に捉えることが難しかったのではないだろうか。

いずれにしても問28・29については正答率がわずか10%しかない。ワークシートのデザインや選択肢として使用する語の選択については、改善の余地が多分にあると考える。続く問30・31についても正答率は14%で非常に低い。言い換えの要素により難易度が高くなっていることは昨年度と同様に評価できる部分であるが、やはりワークシートの内容については改善の余地がある。必要なポイントを簡潔に示すことで考えをまとめていくのがワークシートの本来的な役割だと思うが、本問のワークシートは音声スクリプトの語句が断片的に示されているメモ書きの要素が強いと感じる。

問32 試作問題からの出題。活動2として、講義の要約を書く準備をしている場面。講義内容について二人の発言を聞き、その正誤を答える問題。Student Bの発言については後半の“original gift givers”が捉えられないと正誤の判断ができないので、難易度はやや高めである。

問33 活動3として、三人で図表を見ながらディスカッションの準備をしている場面。本問では、講義の内容を踏まえ、複数人の意見を聞き取り、図表を読み取り、選択肢の内容を読み取らなけ

ればならない。限られた時間の中で、受験者は多くの情報処理が求められており、問題の難易度は高いと言える。しかしながら、このような行為はまさに授業の前後で行われていることでもある。これまでの学校生活で得てきた経験の差が強く影響する設問であり、高等学校での授業の在り方等にも影響を与えうるという観点で良問という評価ができる。

第6問 Aでは二人の対話を聞き、問いの答えとして適切なものを選ぶ問題。「食事のとり方」がテーマだった。放送音声にやや高度な語彙が含まれていたが、問いの選択肢にもその語があるので理解しやすかったと思われる。また、ここでも意見をまとめたり、言い換えたりする力が問われている。一方Bでは鳥にえさを与えることについて三人の学生が話す内容から、それぞれの立場を理解する力と、考えの根拠となるデータ（図表）を判断する力が問われた。

問34 話者の一人（Kelsey）が示した意見を選ぶ問題。

問35 もう一人の話者（Dan）が決めたことを選ぶ問題。

問34・35で問うていることは大差ないように感じるが、正答率は大きく異なっている。Danの最後の発言の“I'll chew more, eat less 〜”で使われている語から②の錯乱肢を選んだ受験者が多かったのかもしれない。

問36 会話の最後で三人の話者がどのような立場にあるかを問う問題。話者の数が昨年度の四人から三人へと減少したことや、会話の最後にEmilyの立場も明確に示されていることから、受験者には取り組みやすい問題であったと言える。

問37 会話では登場しない表現（Bird Strikes／Sighting）なども散見されたが、Disease-carryingは音声のvirusesと結び付けやすかったと思われる。

3 総評・まとめ

本稿では2025年度（令和7年度）共通テスト「英語（リスニング）」（本試験）について検討してきた。大学入試センター発表の問題作成方針にも示されているように、「文字や音声による試験の特徴を生かしながら」、「可能な限り総合的な英語力を評価する」という方針での問題作成には、相当量の手間に加えて創造力を要すると思われる。様々な場面や状況を設定し、その中で知識・技能や思考力・判断力・表現力等を問う内容となっており、また、外国語に関する様々な知識を実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況などに応じて適切に活用できる技能を身に付ける、という学習指導要領における目標を反映した出題となっている。受験者が高校生活で得てきたことを生かせるような良問も多い。

しかし一方で、技能統合的な理解を求める問題や、情報や考えなどの概要や要点、詳細、話し手や書き手の意図などを的確に理解する力を問う問題については、改善の余地がある。昨年度までの平均点の上昇傾向を受け、難易度を上げる意図のもとになされた作問もあると思うが、飽くまでも「リスニング」の力を測る試験であることを念頭に置いた作問をお願いしたい。例えば、講義の内容や会話の話題の抽象度であったり、音声の読み上げ速度に変化を加えることでも難易度の調整は可能であると考えられる。一方で、資料やデータの数を増やしたりすることにより、受験者の作業量を増やすような負荷のかけ方については、慎重な検討が求められるところである。

4 今後の共通テストへの要望

今年度は、昨年度までの平均点の上昇傾向を受けてか、やや難易度の高い問題が増え、結果として61.31点という平均点になった。この点数自体は適切であると考えられるが、難易度の調整方法については引き続き多面的な検討を望みたい。まとめでも触れたが、技能統合的な理解を求める問題を作成するに当たり、受験者の作業量の多さや情報処理の複雑さによる問題の難化は、リスニングの力

を測る試験としては望ましいものではない。むしろ、扱うトピック自体の抽象度を高めたり、読み上げ速度を調整することで、出題範囲内としている「CEFRの概ねA1～B1レベル」内でも多様な作問が可能となると考えるので、検討をお願いしたい。

問題作成方針において示された目標に基づく作問は、高等学校の授業内容や方針改善への動機付けとなっている。高等学校で学んできたことが共通テストでしっかりと生かせることで、教育現場と共通テスト双方からより高い英語運用力の育成へと働きかけができると思う。したがって、受験者及び教育現場にとって適切な働きかけがなされているか否かの検証をお願いしたいところである。

最後に、リスニングテストとスピーキングテストの融合についてはこれまでも提案してきたところである。従来課題とされてきた技術的な側面については、解決の兆しはかなり見えてきているように感じる。実際、すでに様々な英語検定試験において、タブレット型端末等の利用により、スピーキングやライティングの能力を測っている。近年発達著しいAIを活用し、これまで他の試験で蓄積されてきた知見も活用すれば、採点期間の問題や採点の公平性の問題についても担保された、新たな技能統合型の試験も実施可能であると思うので、是非検討を進めていただきたい。